



# Road to Göteborg JWOC2008 への道のり

## 新井 宏美 選手

ジュニア世界オリエンテーリング選手権大会 女子日本代表  
(新潟大学オリエンテーリング部 所属)

JWOCをご存じだろうか。ジュニア世界オリエンテーリング選手権大会。二十歳以下の選手によるオリエンテーリングの世界大会である。毎年世界各国で行われており、今年はスウェーデンのヨーテボリ（\*1）にて、6月29日の開会式を皮切りに8日間の日程で開催される。そのJWOCに、新潟大学オリエンテーリング部（=新大OC）の新井宏美選手が出場する。出国前の新井選手に、オリエンテーリングとの出会い、そしてJWOCへの意気込みについて語ってもらった。

取材・文/古田島真之  
新潟県オリエンテーリング協会  
(<http://www.orientteering.com/~noa>)  
取材協力/新潟大学オリエンテーリングクラブ

出会った人や物によりその後の人生は大きく変わるものである。JWOC日本代表。オリエンテーリングに出会ったからこそ掴んだ夢の切符である。新井選手の場合、オリエンテーリングを始めたきっかけは何だったのだろうか。

英語とお琴をやっていました。

「高校時代は文化部でした。」  
意外な一言が飛び出した。ジュニアとはいえ日本代表。運動に明け暮れた高校時代を想像していたが、そうではないようだ。もう少し話を聞く。  
「もともと体育会系の人間だったのですが、高校でいったん休みたいな、という気持ちになって文化部に入りました。」  
実は、小学校ではバレーボール部、中学校では剣道部に所属していたとのこと。  
「今も（和楽器の演奏活動を行う）邦楽部に所属していて、文化系と運動系を何とか両立させているところですよ。」  
まさに文武両道。一流のオリエンティアがしばしばそうであるように（\*2）、多彩な顔を持つ選手である。では、色々ある大学のサークルの中でなぜオリエンテーリング部を選んだのだろうか。  
「（サークル紹介の）ガイダンスで（オリエンテーリング部の）先輩に連れて行かれて…。週1で体育館を使って球技ができる、と話があり（笑）、それで入部することにしました。」➤

軽い気持ちで入部した新井選手だが、本格的にトレインに入った「不動の滝」でのランクアップ合宿（\*3）ではやはりカルチャーショックを受けたいらしい。まずは、遠征時の移動時間に驚く。  
「（合宿の開催地まで）何時間かかるんですか、と聞いたときにすくびっくりしました（笑）。そのときは5時間くらいと言われて、（「近い、近い」と先輩に言われ）最初はその感覚がぜんぜん理解できなかったです。」  
良質なトレインにアクセスするには地理的に不利な新潟。その後、10時間以上の移動時間を経験し、新井選手も5時間で「近い」という感覚が身に付いてきたという。人間の適応力たるや…。  
そして、初めての本格的なオリエンテーリング。

そこに…、入っていくんだ！って思いました。最初は。

「ある程度想像はできていたのですが、女子の先輩に指導していただいて、（その先輩が）ヤブの中に入っていく姿がとても…嬉しくて…、印象的で…。どっか回って行かないのかなぁ、っていう風に思いました。」  
獣道さえ無い林の中を限界速度で駆けぬける。そんなオリエンテーリングの特異性に、やはりとまどったそうだ。  
しかし、これに懲りることなく夏合宿にも参加する。その最終日には、インカレを意識した6kmのコースを舞台に「新大杯」と呼ばれる学内大会が行われる。➤

4時間半もの長い間見知らぬ山中を彷徨い、オリエンテーリングを嫌にならなかつたのだろうか？  
「まあ、若干（笑）。でも、何か、とても達成感があったので、それで続けられている感じがします。」  
そんな形でオリエンテーリングにはまり始めた新井選手。JWOCを知ったのは以外と早い時期だったという。➤

そのころは全然雲の上の存在みたいな感じに思っていました。

「去年の6月、入部すぐぐらいいに、土屋先輩（\*5）がJWOCに出場されました。JWOCって何だろうと思いついてみると、そういう大会があるんだと知りました。世界大会に出場するというところで、すごいなぁと…。そのうち、（10月の）インカレロングぐらいいから行ってみたいなぁと言う気持ちが出てきて。」  
インカレロング。ここで新井選手の才能が開花。その後のオリエンテーリング人生において一つの転機となる大会となった。  
「（3km弱の新人クラスに出場し）何とか3位に入れました。自信がいった感じがします。」  
このころのトレーニング状況を聞いてみた。  
「いやー、もう、ほんと体を動かす程度で。ロードを多く走っていたんですけども、正門コース（\*6）2周を、週2、3回ぐらいです。」  
選手権クラスを目標とするオリエンティアとしては決して質量ともに満足はいくものではない。インカレロング以前までJWOCはまだ遠い存在だったようだ。インカレロングの結果を受けJWOC出場が見えてきたか、という問いに對し、新井選手はこう答えた。  
「見えてきた、と言うよりは行きたいなという感じです。」  
しかし、高校時代に文化部に所属していた新井選手にとって、故障を防ぐ意味でもこのくらいの練習量でちょうどよかったのかもしれない。この大会で自信をつけた後は、掲げる目標も高くなっていく。

「（インカレロングの）次が、すぐにインカレミドルの北信越セレクションがありまして、それは何とか通りたいなと思いました。今年は結構棒が多かったみたいで、女子の（競技者の）数も少ないので、選手権クラスを走ってみたいなって。」  
トレーニングの内容にも変化が見られる。  
「不整地走、松林（\*7）などを多く走るようになりました。1回5kmとかそれぐらいで、（トレーニングの質も）日によって変えるようにしました。体がだるいときにはジョグ程度にゆっくり走って、調子がいいときはスピードトレーニングのもの、というように日によって（メニューを）変えて練習していました。」  
頭を使うトレーニングも3月インカレを意識した内容に変わっていく。  
「地図読みの量が増えた感じですよ。インカレミドルは奈良県であったのですが、その旧マップを使って先輩方と一緒に地図を読みました。（地図読みをしたときの印象は）結構厳しいトレインでした。」  
傾斜が急なトレインへの対応のため、尾根をたどるルートを探したり、尾根線・沢線・の乗り換えでパラレルエラーを防ぐ方法を研究したそうだ。その結果…。  
「セレクションを何とか通ることができました。」  
見事、選手権クラスへの出場を決めることができたのである。しかし、セレクションを通過してからは、思うような練習ができなかったようだ。  
「その頃は本当に兼部が一番忙しくて。この1年間は主体が邦楽部の方だったので、（オリエンテーリングの）練習時間も正規の部活の時間ではなく、空いている時間に設定しました。新大のオリエンテーリング部は結構自由参加なので。」  
そして臨んだインカレミドル。  
「インカレロングは新人だけのクラスへの出場でしたが、今度のミドルは、トップレベルの選手と一緒に走るということで、その中で自分がどれぐらいのレベルにあるのか全くわかりませんでした。とにかく練習で学んだことを一つ一つやろうという感じで予選を走りました。」  
その結果は？

プログラムのAファイナルのスタート方法とか、全く読んでいませんでした（笑）。

「何とかAファイナルに進んで、結果14位になりました。予選を通るとは思っていなかったのですが、『Aファイナル行けるよ』って先輩から聞かされて、とても驚きました。全然準備とか何もしてなくて（笑）。そこから慌てて（プログラムを）読んで、調整をした感じですよ。Aファイナルでは集団走になってしまって、なかなか自分のペースで走れませんでした。ですが、今の自分の力を発揮することができたのかなと思います。」  
1年生で14位というすばらしい結果を残すことができた新井選手だが、この結果に満足はしていない。東北大学1年の本間選手が新井選手を越える成績でゴールしていることに触れ、少し悔しいのでは（笑）と聞いてみると…  
「はい（笑）」  
と一言。常に上を目指す前向きな姿勢こそ、新井選手の最大の武器なのかもしれない。ミドルでは好成績を収めることができたが、続くリレーはどうだったのだろうか？  
「4年生の先輩2人と私で走ったのですが、（女子部員が現在4人しかいないので）4年生が卒業してしまったら私にとって最初で最後のリレーになるかもしれないという➤

気持ちで…。少し緊張していました。そして1走の先輩がとても良いペースで戻ってきてくださったので、私もがんばらなきゃという感じで挑みました。1本はうまくいけたのですが、その後に逆正置をしてしまい…。結構悲惨なレースでした。」

リレー後、本気で泣きました（苦笑）

普段ははかからないプレッシャーが新井選手を襲う。リレーの怖さをまざまざと見せつけられたに違いない。それでも、こう付け加えることを忘れないあたりが流石である。「でも、（今考えると）いい経験ができたと思います。」



\*1 スウェーデン第2の都市。首都ストックホルムがバイキング時代からの歴史を持つ落ち着いた雰囲気のあるのに対し、ヨーテボリは1621年に時の国王グスタフ・アドルフII世の指示で誕生した比較的新しい街である。そのためか、「ヨーテボリこそスウェーデンの若者文化の中心地である」と自負する市民が多く、ストックホルムへの対抗意識が強いとされる。

\*2 スイス女子代表として世界選手権でスプリント、ミドル、ロング、リレーの4種目制覇を2度も達成した現世界チャンピオン、シモーネ・ニグリ・ルーガー選手は、生物学者であり、モデルもこなすという。また、サッカーのEURO2008ではスイスの親善大使も務める。

\*3 新大OCで5月に行われる合宿。インカレのセレクションを前に、その名の通りオリエンテーリングの技術をランクアップすることを目的に開催される。新大OCの新入生は、この合宿で初めて本格的なオリエンテーリングに接する。

\*4 6月に山形県で行われている2日間大会。山形県の名産であるサクランボが賞品となっていてオリエンティアに人気を博している。

\*5 新大OC所属の土屋裕輝選手のこと。JWOC2007オーストラリア大会日本代表。新大OCからは新井選手を含め7人のJWOC日本代表が誕生している。

\*6 新大OC定番のジョギングコースの1つ。新大のキャンパスの南側を回るようなコースで1週約3km。正門の他にもロードを利用したコースとして、約5kmの得々、約11kmの小針、同じく約11kmの四ツ郷屋等がある。

\*7 新大の北側にはクロマツの防砂林がある。その林の中は砂丘特有の穏やかな起伏があり、ファートレックのコースとして利用されている。

# Road to Göteborg JWOC2008 への道のり

「（夏合宿までに経験していたコースの距離は）、3kmとかそれぐらいで。ランクアップ合宿とさくらんぼ大会（\*4）しか入ってなかったのよ。（新大杯の）6kmという距離は初めてです。」  
しかしオリエンテーリング経験数回の1年生ながら、難コースを見事に完走する。「経験がない状態で6km走ったので、4時間半ぐらいいかかりました（笑）。最後の方、（タイムリミットまで）あと1時間を切ったぐらいで、もうやめようかと思ったんですけど、給水のところで先輩が『いけるんじゃないか？』っておっしゃってくださった。それで最後まで頑張ってみようか、と。」➤

左上  
インカレロング後の表彰式。  
この大会で新人クラス3位入賞を果たす。  
写真提供：新潟大学オリエンテーリングクラブ

右上  
スウェーデンの森林。  
通行可能度が高く、どこにもコントロールを設置できる微地形が続く。  
岩盤質で滑りやすく、足への負担も大きい。  
（残念ながらヨーテボリではなくワプサラです。）  
撮影：古田島